ただ修業中

662人目

建設会社社員

# 山本翔太さん（24）高知市南新田町

# 「普通の生活」支える

午前7時半。朝日に照らされた土佐市の仁淀川河川敷に、ダンプカー運転手ら15人が集まってきた。ラジオ体操が終わると、元気に指示を出す。「一般車両との接触に注意してください」。最後は全員で指をさし、「合図よし！」。安全確認とともに一日が始まった。

「できるだけ朝礼がマンネリ化しないように、指示や掛け声の内容は毎日変えてます」

国土交通省発注の河床掘削と堤防整備を進める工事現場で、現場所長に次ぐ「現場代理人」を務める。工事の進捗を管理。会社の代表として発注者や協力会社、住民との調整に当たるなど、業務は多岐にわたる。

高知市出身。小学校低学年からサッカーを続け、高知工業高校に進んだ。「外で体を動かすのが好き。人の役に立ちたい」と、2016年春、公共土木工事を手掛ける福留開発（高知市）に就職した。

入社当初は、建材を運んだり現場の面積を測ったり。先輩らの作業を手伝い、仕事の流れを覚えた。「分からんことや気付いたことがあれば書いておけ」とのアドバイスに従い、胸ポケットに忍ばせたメモ帳を引っ張り出しては書き付けた。成長の証しでもあるメモ帳は、20冊超になった。「同じ現場は二つとない。目の前でできることを精いっぱい覚え、次に生かす」。そんな気概と持ち前の体力で経験を重ねてきた。

建設業の現場は、情報通信技術（ICT）の導入により、仕事が大きく変わりつつある。

例えば、測量。従来は2人一組で行ってきたが、ICT対応機器なら1人でできる。図面データと瞬時に照合することも可能。場所によってはドローンも駆使する。ただ、1人で機器を扱い始めた時に大きな失敗も。測量結果がずれており、全工程をやり直す必要に迫られた。

「下請けの方にも迷惑をかけて、すごく悔しかった。技術に頼りっぱなしじゃなく、作業の基本を理解する。万全な準備、確認を欠かさないことが大事」と胸に刻んだ。

学校では勉強が好きな方ではなかったが、今は「仕事につながるので苦じゃない。もっと勉強していかないと」と貪欲。どんどん進化するICTを自分のものにし、「新しいことに挑戦していきたい」と意気込む。

昨年4月。高知市の県道高知本山線の整備で、初めて現場代理人を任せられた。自分の責任で工事を段取るプレッシャーは大きく、「現場がうまく回らない夢を見て、ブルーな気持ちで目が覚めるほど」。親子ほど年の離れたベテラン作業員たちと努めてコミュニケーションを取り、「みんなに教えてもらいながら」進めた工事は、県の優良建設工事に選ばれた。

「1年をかけた工事。完成時には、言い表せないほどの達成感と充実感があった。表彰は、皆のチームワークが評価されてのこと」と顔をほころばせる。

就職するまで、建設業に抱いていたイメージは「外で作業して物を作り上げる」という漠としたものだった。それがどんどん明確になるのを感じる。

「できてしまえば、目立たない物もある。でも、地域の方々が『普通の生活』を安全に送ってもらえる、なくてはならない仕事です」。目に力を込めて、そう話した。

写真・土居賢一
文・井上智仁

現場の写真撮影や測量ではドローンを駆使する山本翔太さん（いの町加田）

好きな言葉

◆月曜日掲載